

外来生物による植生の変化や絶滅危惧種の増加、気候変動による自然への被害拡大、プラスチック汚染による海洋環境の悪化など、生物多様性に関する報道を、目にする機会が年々増えてきた。生物多様性は、種の多様性・種内の多様性・生態系の多様性という、3つの多様性によって定義づけられており、意識をしなければ私たち人間のくらしとの繋がりが見えにくい概念である。小学生が生物多様性について学ぶ機会の多くは、理科を中心とした授業場面である。今回の学習指導要領改訂に際して、理科の見方・考え方が整理された。見方については、「生命」を柱とする領域において、多様性と共通性の視点で捉えることが明示されている。生物の構造と機能、生命の連続性、生物と環境との関わりについて実験・観察することを通して、多様性という視点から生命に関する科学の基本的な概念を児童に獲得させることが求められているのである。

本稿では、本書の内容を教育（主に理科授業）に生かす方策について、3つの観点から考察する。1つ目は、生態系における自分たちの位置づけについて、2つ目は批判的思考について、3つ目は、生態系サービスへの気付きについてである。

1つ目の、生態系における自分たちの位置づけについてである。第六学年の授業場面(食物連鎖)を取り上げて考えたい。ここでは関係図や食物ピラミッドの図などを基に、生物の間には、食う・食われるという関係があることを学習する。教科書に掲載された資料に目を向けると、人間の姿が描かれていないことが分かる。それでは、生態系が自分たちを取り巻く世界の外側にあるという、誤った認識をもたせかねない。様々な生物を食料とする人間が、生物同士の関係性の中で、どのように位置づくのかを児童に考察させることで、自分も生態系の一部であるという認識が深まるだろう。

2つ目の、批判的思考についてである。著者は、自然を守るための善き行いとして認識されがちな行為が、自然にとって有害な行為となりうる可能性を指摘している。例えば、河原の自然植生を刈り払い、コスモスのフラワーベルトにすることは、生物多様性の保全にとって慎むべき行為であるという。勤務校の周辺でも、田畑を整地しコスモス畑にしたり、河原に園芸植物を植えたりしている場所があり、それらは一見すると美しく見える。児童が当たり前で捉えている風景も、生物多様性という観点から問い直すことで、見え方が異なってくる。どのような行いが自然や環境にとって良いのかを批判的に思考できる児童を育てるためには、生物多様性という概念を獲得させ、その概念を視点として、自分たちの行いを問い直す力を身に付けさせることが重要であると考え。校内や地域の自然環境を見つめ直すフィールドワークを、理科や総合的な学習の中で行うことができるのではないだろうか。

3つ目の、生態系サービスへの気付きについてである。生物多様性の重要性は、定義を形式的に教え込むだけで児童が認識できるものではない。生物多様性を保全していくことが、自分たちの生活にとってどのような恩恵に繋がるのかを考えさせたい。自分たちのくらしが資源提供・調整・文化などの生態系サービスによって支えられていることに児童が気付くことができれば、身近な自然環境や生物を大切にしようという態度が醸成されると考える。

以上、本書の内容を教育に生かす方策について、3つの観点から考察した。生物多様性という概念を児童に獲得させることは、地域や地球の環境や生物を保全する、持続可能な社会の担い手を育成することに繋がる。自然を保全しようとする態度を養うには、生物が好きであるということが必要条件となる。児童が自然と接する機会をより多く確保し、自然を愛する児童を育てていきたい。